



533  
佐藤仁 著

先進国を中心に、20世紀後半から見られた飛躍的な経済発展は、繁栄を誇ったと同時に、経済格差も拡大させるものであった。環境破壊が進出し、水や食料確保にも危機感が募っている。富の分配は不平等であり、分断された社会の至る所で争いが生じている。なぜ発展を遂げたはずの社会で人々は争うのか。

本書は、争いを生み出す構造を根

## 開かれた依存関係へ

本的に考え直し、争いのない社会への方向を探る。鍵となるのは、人々をつなぐ「開かれた依存」だ。

第1部「発展の遠心力」では、競争原理が価値を一元化し、過度の分業が格差と孤立を生むことを指摘する。また、途上国の開発援助でうたわれる経済的自立の内実を探る。自立した個人を前提とした発展が格差を広げ、富の分配の争いを生み出すのだ。そして著者が研究する国際開発協力の現場で経験した「負の受け入れ方」のように、競争を争いに転化させない工夫を歴史的に見る。

第2部は「支配の求心力」。発展で

さつじん 1968年、東京生まれ。東京大東洋文化研究所教授。著書に「野蠻から生存の開発論」「教えてみた「米国トップ校」など。

得た富を守るため、武力や制度的保障が求められる。つまり発展の遠心力は個々人の自由を裏付ける領域を広げていく一方、特権の集中が生じ、支配が強化されていくのだ。格差と権力の集中は争いを生む。

争わないために、進化論という適者生存の社会への応用を見直し、相互扶助による依存関係の重要性を示す。また、自然資源の私的所有に抵抗する人々の事例を描く。

発展の遠心力と支配の求心力を調整し、争いを防ぐ道を模索するのが

第3部「依存の想像力」。著者は、社会の中でも弱い立場に置かれた人々の連帯が、極端な発展の拡大と支配の集中を「中」に引き戻してきたという。支配層と個人の縦の依存関係ではなく、弱さをつなぎ目として相互に支え合う「開かれた依存関係」への組み替えを目指す必要があるのだ。

個人／共同体、伝統／近代と二項を対立させるのではなく、二つの間に位置するだろう中間集団を想像すること。本書の呼び掛けは生きつらさにあえぐ人にも届くはずだ。

(雑賀恵子・社会学者)

●NHK出版・1870円